



The Twentieth-fourth Regular Report

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務局
ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務局

カンボジア



カンボジア国立博物館の保存修理

ソコンテア・ソート

文化芸術省 博物館局 事業・企画事務所 職員

キルギス共和国



キルギス共和国のキョク・タッシュ墳墓

クンボルト・アクマトフ

キルギス・トルコ国立マナス大学 考古学民族学研究博物館 専門職員

ネパール



パタン・ダルバール保護記念物地区：地震被災文化遺産の再生

スレシュ・スラス・シュレスタ

ネパール政府考古学局世界遺産修復部 課長

パプアニューギニア



岐路に立つモツポア島：高まる価値と先細る保護管理についての一考察

ジェイソン・カリウィガ

パプア・ニューギニア大学 教育助手

スリランカ



スリランカ北部州ジャフナ地区にあるテル・ムーディ・マダムの歴史と修復

ゲティ・タラバジャ

国家遺産省 考古学局 考古学地域事務所(北部) 考古学博物館 開発職員III

カンボジア

	カンボジア国立博物館の保存修理
	ソコンテア・ソート 職員 文化芸術省 博物館局 事業・企画事務所

1. はじめに

カンボジア国立博物館はプノンペン中心部の 13 番街にあり、王宮（北）の隣に位置します。博物館には、彫刻、陶器、民族誌などのクメール文化資料の世界最大級のコレクションが収蔵されています。当館は、来館者へ学ぶ場を提供し、感動を与えることを目的として、カンボジアの文化資料の展示、保存、保管、解釈、収集を通じてカンボジア文化遺産への理解や認識を深める活動を推進しています。国立博物館の建築様式とデザインは、若い建築家が伝統的なクメール建築を学ぶ上でも重要な意味を持っています。このクメール建築の真髄とも言える建物のデザインは、今日では「伝統的なクメール建築」の代名詞となっています。ですので、当博物館は収蔵品とともに建物も保存することが重要です。

国立博物館の建物を保護するために、今年は主要 3 事業に取り組んでいます。ハトの侵入防止、南側の屋根の修復、木製の窓や扉の傷んだ部分の補修と再塗装などです。また、博物館局は文化芸術省の他局と協力して、専門家と技術者の協力を得て屋根の修復作業を行っています。

2. 歴史的背景

国立博物館は、1917 年に建設され、フランスの保護国時代（1863 年～1953 年）の 1920 年に開館しましたが、設計はジョージ・グロスリエ（George Groslier）、館長はアルベール・サロー（Albert Sarraut）でした。王立美術大学の教師や学生が、木製の窓や扉の装飾および伝統的民話に登場する様々な人物を描いた絵画の製作を担当しました。1920 年の設計では、3 棟の主要建物だけで構成されていましたが、1924 年に東側正面の両端に翼棟が増築され、建物はさらに堂々としたものになりました。1969 年には、チェー・テイ・セン（Chea Thay Seng）氏の指揮のもと、東展示室が再建されました。改修工事では、上層階に事務室と図書室、地下倉庫が新たに併設されました。この建物は、博物館（東展示室）と王宮美術装飾学校（南、西、北展示室）として使用されています。



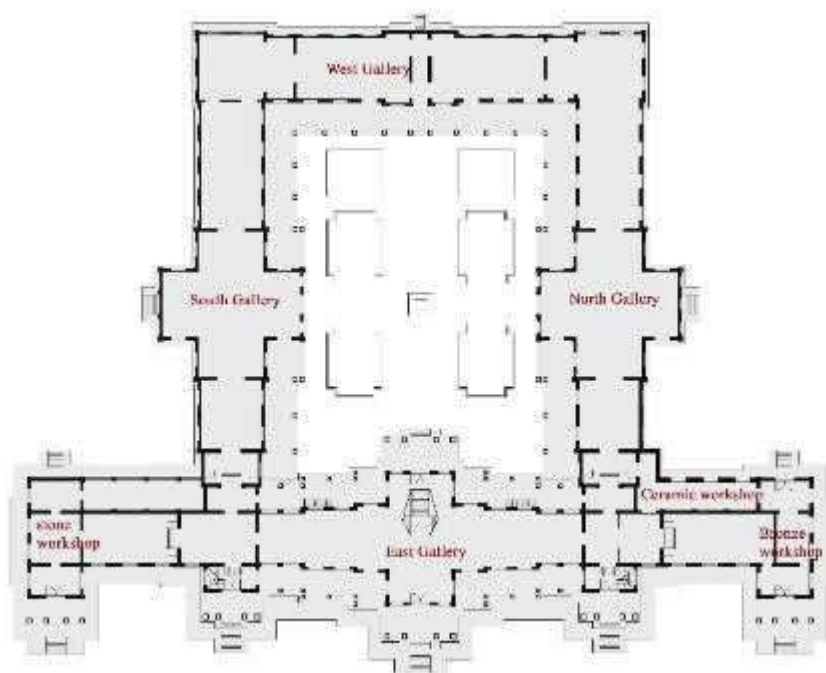
1920 年の元のデザイン



東正面の両端に増築された翼棟

3. 平面図

国立博物館は、東正面に伝統的なクメール装飾で飾られた 3 つの屋根がある巨大な建物で、東正面の両側には 2 つの翼棟があります。両翼棟は現在、収蔵物の修理工房（石製品、青銅器、陶器）として使用されており、本館は臨時の展示室となっています。上層階は管理事務所となっており、地下には図書室と収蔵庫があります。



博物館の 1 階平面図

4. 損傷

100 年も経過すると、外装、1 階、壁、屋根構造、装飾などほとんどの部分が傷んでいます。大気（雨、日光）や動物による被害が多数あります。雨で基礎周りが浸水して腐食の原因となっています。また、ハトが屋根など建物のいたる所に生息しており、ハトの巣や糞、卵の殻が貯水槽の上に堆積し、水が流れなくなり、タイルが欠損して建物内に水がしみ込み、木材の腐食を引き起こしています。その他、レンガの壁が腐食し、建物基礎部には苔が繁茂しています。

4.1 損傷部材

屋根：腐食した木材、欠損・破損した屋根瓦、老朽化した貯水槽、破損した装飾品

壁：レンガ壁のモルタルの腐食、基礎部の苔やひび割れ

窓と扉：装飾品の退色、彩色画の劣化、木製のドアのひび割れ

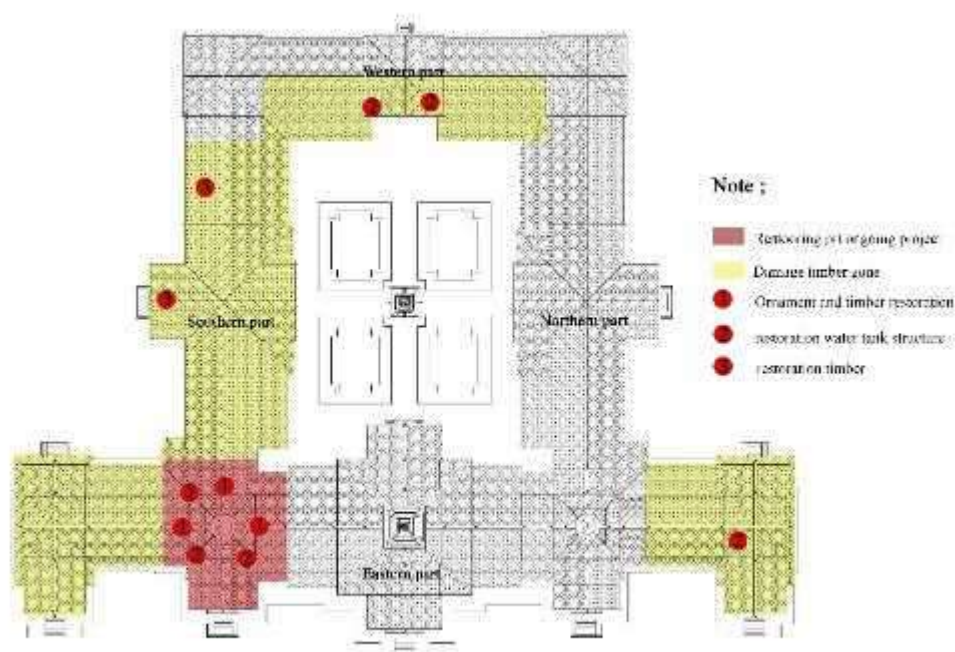
床：床タイルの破損、収縮、腐食

基礎：基礎部周囲の苔、ひび割れ、腐食

5. 修復活動

5.1 修理

博物館を保存するために、現在 3 事業が進行中です。第 1 の事業は屋根の修復です。博物館局は文化芸術省記念物保護保存局と協力して、屋根の損傷修復に関する専門知識と技術を提供しています。以下にその手順を紹介します。屋根の一部を修復し、損傷を防ぎ、深刻な損傷を受けている部分を特定します。修復前、修復中、修復完了後には記録作成（写真、リスクマップ、報告書）を行います。南東部の屋根を修復し、瓦を撤去し、装飾品を取り外し、腐った木材と屋根にある貯水槽を取り除き、新しい木材部品を取り付けます。伝統的な塗料で貯水槽の防水をします。そして瓦を再度取り付けます。古い瓦が数枚壊れているので、外観を変えないために同色の新しい瓦を用意する必要があります。



損傷した木材部材



損傷した木材部材：修復前と修復後



損傷した木材部材：修復前と修復後



損傷した木材部材：修復前と修復後

5.2 予防的措置

第2の事業は、ハトから博物館を守る計画です。ハトの巣や糞は、屋根構造、建物の美観、博物館の収蔵品などに害を及ぼすため、建物にとって重大な問題となっています。この計画では、ハトが住みついた建物部分からハトを閉め出すために防護用遮蔽物を設置します。ハトは屋根の段差間や窓枠、梁、装飾屋根などに生息していますが、巣作りの場所がなければ、建物を退去するでしょう。

5.3 窓と扉の修理

第3の事業計画は、窓や扉の劣化した塗料を取り除き、伝統的な塗料で再塗装することです。再塗装する前には、扉の亀裂を木片で埋めます。

6. さいごに

屋根から 1 階まで、国立博物館全体が損傷を受けていますが、建物を保護するためには、まず屋根の修復とハト対策が必要です。次の作業計画では、建物基礎部や壁の補修が中心になるでしょう。また、上記の修復活動の他にも、建物の一部に消防設備を設置し、その動作確認など、防火システムの維持管理活動も進めています。最後に、博物館における建築保存作業について学生達に発表することが、次のステップです。

キルギス共和国

	キルギス共和国のキョク・タッシュ墳墓
	クンボルト・アクマトフ 専門職員 キルギス・トルコ国立マナス大学 考古学民族学研究博物館

馬具は、天山山脈にあるモンゴル時代の墳墓では最もありふれた副葬品ですが、男女どちらの墓でも見つかっています。記録によれば子供の墓でも発掘されています。普通、馬具は被葬者の足元に置かれており、頭部や他の体部の近くにはほとんどありません。

すべてがそろった馬具はほとんどなく、多くの場合、鞍、はみ、鐙（あぶみ）、または腹帯の留め金が組み合わされたものが発見されています。また、はみと鐙、あるいは鞍と鐙の組み合わせがいくつかの墳墓で記録されています。興味深いのは、すべてがそろった馬具が発見された 3 事例のすべてが、女性の墳墓であることです。その中には、馬勒（ばろく）を含み、はみ、鞍、鐙、腹帯の留め金などがついているものやついていないものがありました。馬勒には金属板で豪華に装飾されているものもありました。考古発掘遺物に基づいて、絵画資料を参考にし、13 世紀から 14 世紀に天山地方の人々に使用されていた馬具を復元することができます。

4 件の馬勒遺物が、天山山脈にある墳墓で発見されました。セキ I 墓地の女性の墓から見つかった馬勒は、より完全で見事なもので、私たちは容易にかつ正確に復元することができました。私たちの復元によると、この馬勒は、革製のおもがいからなり、それは鼻革、額革、2 本の頬革、頭部革、喉革、鉄製はみ、2 本の手綱用のリード革紐から構成されています。おもがい部は金属板と垂れ飾りで豪華に装飾されています。頬革と鼻革と額革の接続部には、大きくて丸い銘板が取り付けられています。頬革と鼻革には E 型の銘板が取り付けられています。鼻革の中央にあるハート型の革製垂れ飾りの装飾のために、同じ銘板が使われています。額革は三角形の銘板で装飾されていて、球形の青銅製の鈴も取り付けられています。はみは、両端に大きな丸いリングが付いた 2 個の水勒で構成されており、そこに手綱が取り付けられています。

墳墓から出土した鞍一式は、木製の鞍杵、鉄製の鐙、腹帯の留め金、胸革としりがい部につけた金属製の垂れ飾りなどです。鞍杵（鞍骨）は、2 枚の横板、垂直な鞍頭と傾斜した後部鞍骨で構成されており、これらは革紐でしっかりと結ばれています。これは、いわゆる「モンゴル式」と呼ばれるタイプのもので、11-12 世紀頃に作られたとされています。天山山脈には 3 つのタイプの「モンゴル式」鞍があります。主な違いは、鞍の形にあります。明らかに、異なるタイプの鞍は、目的や年齢・性別の異なる集団に使用されていました。例えば、台形の鞍は主に女性が使用していたと考えられています。鞍には腹帯の革紐、胸革紐、しりがい革紐がついていましたが、墳墓には残っていません。しかし、金属や骨で作られた腹帯の留め金や垂れ飾りが発見されており、これらは我々の復元に含まれています。墳墓遺跡から出土した鐙は鉄製で、足の上にアーチを形成する 2 本の支柱と、足を乗せるための踏面から構成されています。ア

アーチ型、台形、丸型の三種類があります。出土品の数から判断すると、アーチ型の鐙が広く使われていたことがわかります。

おおむね墳墓出土品は、ほぼ完璧な重要情報源であると結論できるかもしれません。私どもは絵画資料を考慮に入れつつ、これらの考古資料をもとに、モンゴル時代の天山山脈に住む人々の馬具を、最も可能性の高い元の形に復元することができました。

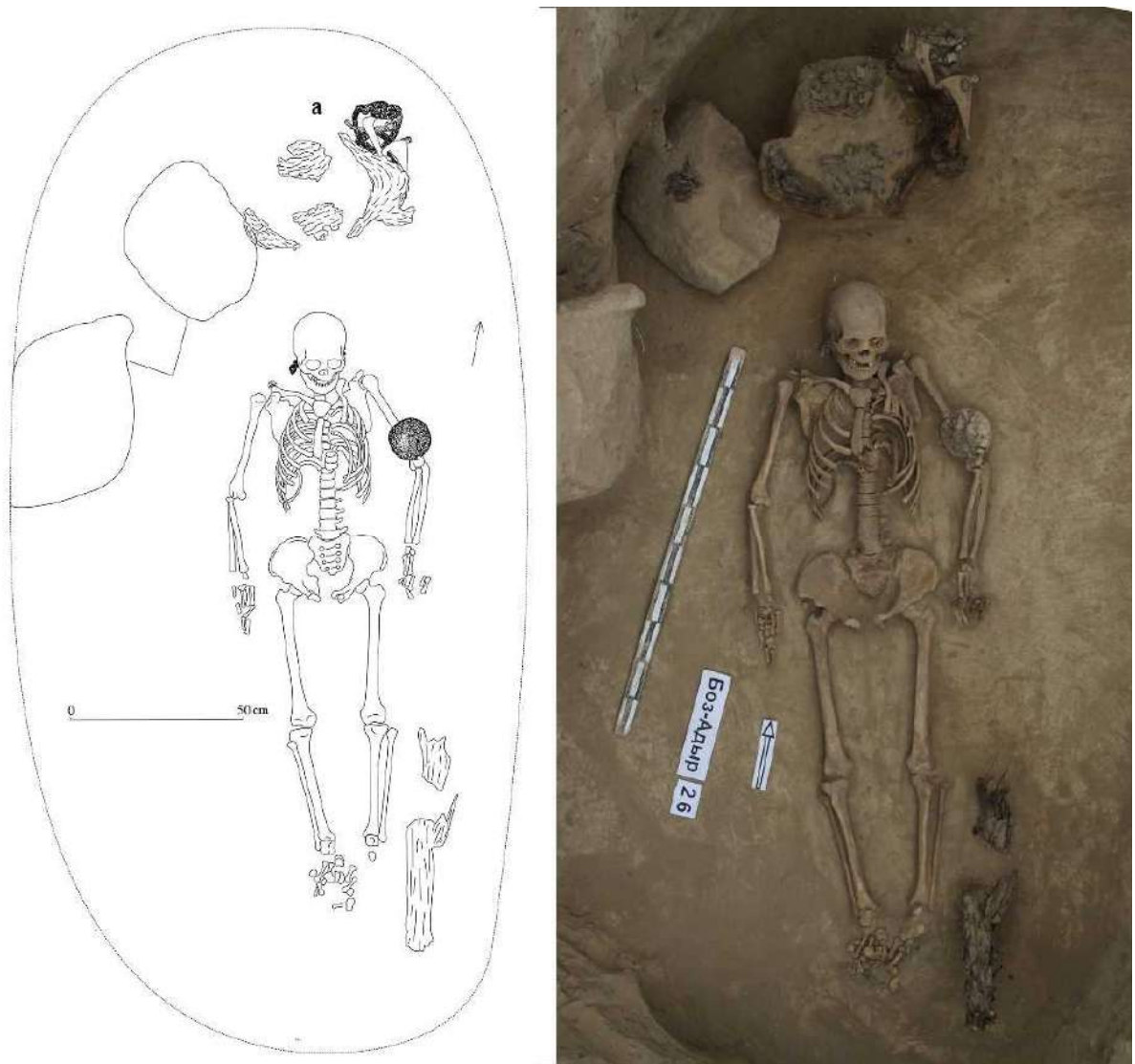


図1 Boz-Adyr 墓地にある墳墓 26 番の写真と図版、馬具遺物 (a) 共に埋葬されている。

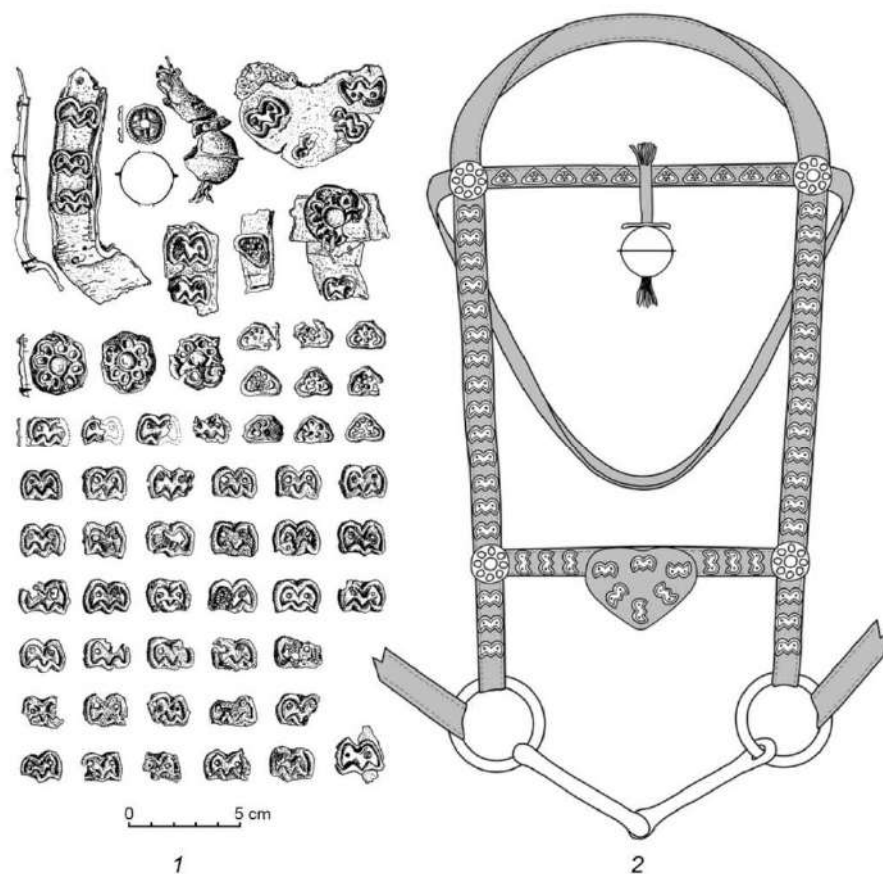


図2 セキ墓地から見つかった馬勒遺物（1）とその復元図（2）

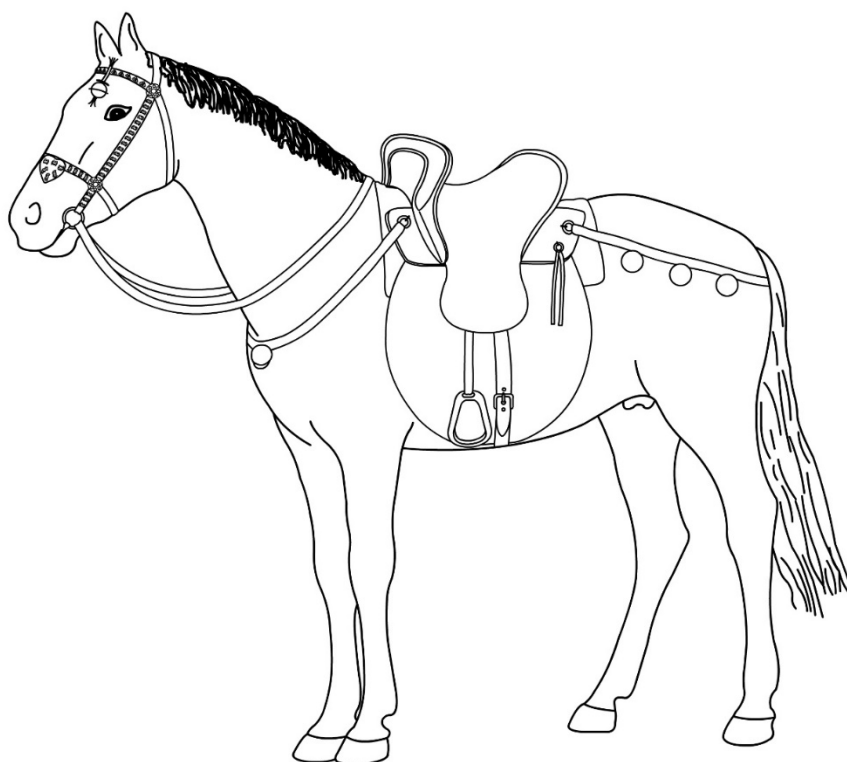


図3 13～14世紀の天山山脈の遊牧民の馬具復元図

ネパール

	パタン・ダルバール保護記念物地区：地震被災文化遺産の再生
	スレシュ・スラス・シュレスタ 課長 ネパール政府考古学局世界遺産修復課

1. はじめに

ネパールには輝かしい歴史があり、その多彩な文化遺産は世界中に知られており、特にリッチャヴィ朝はネパール古代史における黄金時代として周知されています。独自の青銅美術や木工芸および建築などが、青銅美術の黄金期である中世に発展しましたが、特にカトマンズ溪谷には今も現存しています。同様の美術や建築はシャー王朝やラナ王朝でも存続し、実際にネパール独自の伝統や文化なのです。それは、ネパールの比類なき文化遺産というだけではなく世界の文化遺産なのです。世界遺産条約の実施のための運用ガイドラインの選択基準を満たした、7 件の記念物地区からなるカトマンズ溪谷は 1979 年にユネスコ世界遺産一覧表に記載されました。25 件の最も重要な記念物が含まれるパタン・ダルバール地区はその記念建造物地区のひとつです。

2015 年のネパール地震は国内 14 地区に甚大な被害を与えました。広範囲の物理的破壊と同時に人命も奪い、合計 35 地区に被害を与えました (DoA 2015)。地震は、ネパール国内の重要な文化遺産を多数破壊し、保護記念物地区 7 件を含む、カトマンズ溪谷の重要な文化的および歴史的建造物が甚大な被害を受け、倒壊しました。この地震によって 170 棟の記念建造物が被害を受けました。カトマンズ溪谷にある世界遺産のうち、33 件の記念建造物が全倒壊し、137 件が部分的に損傷を受け一部倒壊しました (DoA/GoN, 2019)。世界遺産カトマンズ溪谷の構成物件であるパタン・ダルバール保護記念物地区において、7 件が全倒壊し、15 件が部分損壊しました (DoA/GoN, 2015 ; KVPT, 2017)。

ネパール政府考古学局は、被災記念建造物の修復および再建にとりかかりました。カトマンズ溪谷保存トラスト (KVPT) が中心となってネパール政府考古学局 (DoA) の許可を得て連携しつつ、修復と再建を行いました。現在、パタン・ダルバール保護地区のほとんどの記念建造物が再建されています。

2. パタン・ダルバール保護記念物地区の被災記念建造物の再生

どのような被災状況にあっても人命救助が最優先されるのは、世界的な慣例です。その次に他の事物が救済されるべきです (Shrestha, 2009)。ネパール政府や非政府組織など様々な機関からの救助隊が地震直後に援助に入りました (Shrestha, 2016)。現地は壊滅的な状況であり、誰も人類の創造物である遺産には考えが及びませんでした。遺産は常に人命の後に来るのです。とはいえ、考古学局は、地震直後から可能な限り現地を調査し、倒壊・破損した記念建造物の確認だけは行いました。

当初、地震直後から考古学局と連絡が取れた職員は現場に派遣され、状況に応じて事前調査を行いました。地震後 2 日目からはほとんどの職員と連絡がつき、調査が組織的に行えるようになり、この状況で

きることは何でもやりました (Shrestha, 2017)。

それから1週間後予備調査が終了し、考古学局は考古学職員、エンジニア・建築家、写真専門家からなるチームを「緊急文化遺産救助隊」として各現場に派遣しました。このチームは予備調査データを緊急確認し、美術品の緊急救出、構造物の脆弱性の確認など、現場で必要な作業を行いました。救助隊は、ネパール軍、武装警察、ネパール警察と協力して活動しました。この間、考古学局は地震後の文化遺産に関する全活動に関して、救助隊と密接に連携しました (Shrestha, 2017)。この合同救助隊の主な目的は、現場の倒壊・破損した構造物の周囲に散乱している美術品やその他の遺物を回収することでした。そして救助隊はすべての遺物を回収し、記録作成のためにできるだけ適切な場所に保管しました。現場では、写真、救出遺物の名前と数、保管場所、保管者、その他ネパールのムチャルカ（事物を移譲および保管する準備のための伝統的法律文書システム）で使用される必要なデータ一覧表を作成し準備しました。ほとんどの遺跡は救助隊によって保護されましたが、その他の遺跡、特にパタンやサンクーでは、地元自治体が考古学局代表者と協力して同じ方法で救出保護作業を行いました。彼らは、遺産を保護する必要性を強く認識していました。そして考古学局代表者の指導の下、すべての遺物を適切な場所に保管しました。カトマンズ溪谷保存トラストとパタン博物館も同様に最善の努力をしました (DoA/GoN, 2016)。

考古学局はまた、構造専門技術者、建築家、考古学者、地震技術者、法律専門家、その他必要な専門家で構成される全国専門家チームを直ちに編成しました。この専門家チームは、必要に応じて被災現場を訪問し、全遺跡の詳細な評価を行いました (DoA/GoN, 2016a)。また、チームは、しかるべき修復案が策定された後に修復や保存を実施するために、脆弱な構造物や残存構造物を安定させるための適切な指示を出しました (Shrestha, 2016 & 2017)。

その間に、考古学局はイクロムの専門家を招聘し、建造物救助と科学的根拠に基づいた文書記録についての支援を要請しました。その結果、イクロム（文化財保存修復研究国際センター）、イコモス（国際記念物遺跡会議）、アイコム（国際博物館評議会）、スミソニアン博物館の専門家からなる共同特命チームが結成されました。

この特命チームは、避難、救出、緊急時の記録作成のために1週間にわたり作業を行いました。これは、ネパール被災後の遺産救出のための初めての正式業務であり、考古学局の担当職員も参加しており、現地専門家の能力養成の機会が提供されました (DoA, 2015; Shrestha, 2016)。イクロムの共同特命チームは、考古学局チームと一緒に研修兼作業を行いました。考古学局チームには、遺跡技師、建築師、支柱・支持作業を行う伝統的大工、石工、そして請負業者などが含まれており、国内の専門家や考古学局職員の能力養成の機会となりました (DoA/GoN, 2017)。

パタン・ダルバール保護記念物地区の場合、カトマンズ溪谷保存トラスト (KVPT) は NGO として指導的立場に立ち、ネパール政府考古学局の許可を得て、遺物やすべての資材の回収、記録作成、保管のための取り組みを積極的に主導しました。これは後に、記念建造物の修復や再建の際に大いに役立ちました。

カトマンズ溪谷保存トラストは、破損・崩壊した記念建造物、その構成部材、建設土地の安定性について、率先して調査や詳細な研究を行い、回収部材を集めて建造物を再建しました。また、パタン・ダルバール保護記念物地区の文化遺産の保存と修復にも率先して取り組んでいます。

パタン・ダルバール保護記念物地区の利害関係者のほとんどは非常によく協力し合い、地震後の復興活動は非常に円滑に進む結果となりました。地震直後の現場からの全遺物の回収と保管については、地元住民がその重要性をよく理解しており、回収作業の支援に関心をもって取り組んでくれました。そして彼らは、考古学局やその他の地元機関・研究所などと協力して、安全な保管場所の提供を手伝いました (DoA/GoN, 2015a)。

パタン・ダルバール保護記念物地区に関わる主要機関は、考古学局、カトマンズ溪谷保存トラスト、ラリトプル市 (パタン市)、都市警察、多数の地元クラブや団体、マンガル地区福利厚生委員会、ハカ地区福利厚生委員会、そして地元住民らでした。ほぼすべての利害関係者は、カトマンズ溪谷保存トラストが主導的役割を果たすことを承認し、考古学局のガイドラインと指示に従いました。これは、遺跡現場を管理し、管理された方法で復興をさらに進める過程にとって大きな利点となりました。そして、パタン・ダルバール保護記念物地区の各活動は現在も順調に進んでいます。地震後の困難な状況下でも、保存、修復、復興のための活動が行われています。

文化遺産の保存と管理に関する唯一の政府権限付与機関として、考古学局は、すべての文化遺産の保存、修復、再生について許認可を与えねばなりません。そのため遺産保護のパートナーとして、パタン・ダルバール地区で 10 年以上にわたって考古学局と協力して活動を担ってきた、カトマンズ溪谷保存トラストは、2015 年の地震で被災し崩壊した記念物の修復再生許可を申請しました (DoA/GoN, 2016)。ネパール政府考古学局は、カトマンズ溪谷保存トラストが考古学局、ラリトプル市 (LMC)、地元共同体、必要な関係者らと緊密に連携して記念建造物の修復を行う事に許可を与えました。

このような状況の中、カトマンズ溪谷保存トラストによるパタン・ダルバール保護記念物地区の被災記念物の保存・修復事業では、以前に結成されたパタン・ダルバール保存運営委員会が活動を続けています。運営委員会は、地区管理事務所 (CDO 事所)、ラリトプル市、カトマンズ溪谷保存トラスト、カトマンズ溪谷遺産トラスト (カトマンズ溪谷保存トラストの地元協力団体)、都市警察、マンガルバザール (市場)、市/区長 (2 名) ラリトプル市/区の議長、グティ株式会社、パタン記念物保存・ダルバール管理事務所の代表者らで構成されています。委員会の議長は考古学局長が務めました (DoA/GoN, 2015-2018)。カトマンズ溪谷保存トラストは国内の管理運営規則に基づき、国際 NGO として、国家復興局・社会福祉協議会との協力が義務づけられています。

カトマンズ溪谷保存トラストは認可を得て、関連機関、地域共同体、利害関係者らと協調して現場での作業をバランスのとれたやり方で進めました。そして、修復工事はほぼ最終段階にあり、ほとんどすべての記念物が完全に修復・再生されました。地震被災後の適当な修復・再生を進めるために必要な許認可が以下の記念物に与えられました。

1. スンダリ・チョークー東談話室
2. タレジュ寺院を含むマルチョーク
3. マニ・マンダップ（2つのマンダパ）
4. ヨグ・ナレンドラ・マラ石柱像（パタン・ダルバールの前）
5. ビムセン寺院前の石柱
6. クリシュナ・マンディール寺院
7. ビシュウエッシュワル寺院
8. チャル・ナラヤン寺院
9. ハリ・シャンカー寺院

マルチョークのスンダリ・チョークをはじめタレジュ寺院、マニ・マンダップ（2つのマンダパ）、パタン・ダルバール前のヨグ・ナレンドラ・マラ石柱像、ビムセン寺院前の石柱、クリシュナ・マンディール寺院、チャル・ナラヤン寺院、ハリ・シャンカー寺院、ビシュウエッシュワル寺院などの保存・修復はすでに完了しました（DoA/GoN, 2018; 2019; KVPT, 2017）。まもなく完成する予定のクンベッシュワル寺院の保存・修復は考古学局が、ビムセン寺院の修復はカトマンズ溪谷保存トラストの技術支援のもと、ラリトプル市の支援を受けて地元自治体を実施しています（DoA/GoN, 2017, 2019）。

カトマンズ溪谷保存トラストが修復許可を与えられた記念物のほとんどすべての修理・再生工事は完了していますが、まだ完了していない記念建造物もいくつかあります。この世界的な新型コロナウイルス大流行と広範囲な悪影響の中でも、それらの修復もすぐに完了することを願っています。

3. おわりに

2015年ネパール地震は、国内の最も重要な記念物を破壊し、パタン保護記念物地区により甚大な被害を与えました。しかし、関係者らの献身とすぐれた管理および協調が、パタン・ダルバール地域の前向きな修復工事の進展をもたらしました。ラリトプル市は、被災記念物の再生に経済的援助はできませんでしたが、遺産修復と管理について積極的な協力体勢をとりました。そのため、カトマンズ溪谷保護トラストは、国家当局や地域共同体および国際機関と協力して、すべての修復活動を円滑に進めることができました。

パタン・ダルバール保護記念物地区における地震後の保存、改修、再生の経緯が示唆するのは、当局や地元共同体および利害関係者の間で良好かつ十分な調整と優れた経営管理を行えば、これからも損傷・被災したすべての文化遺産の復興を成功裡に行えるということです。これは、ネパール文化遺産の再生のために、地元共同体が参加し全利害関係者が協力した良い実例となりました。

参考文献：

- DoA/GoN (2015). Preliminary Report of Monuments Affected by Earthquake April 25, 2015. Kathmandu: DoA/GoN
- DoA/GoN (2015a). Preliminary Assessment of Monuments Affected by Earthquake 2015 in Patan.

Kathmandu: DoA/GoN (Unpublished Reports)

- DoA/GoN (2016). State of Conservation: Kathmandu Valley World Heritage Property. DoA/GoN (Unpublished Reports).
- DoA/GoN (2016a). Assessment of Monuments Affected by Earthquake 2015 Kathmandu Valley World Heritage Property. Kathmandu: DoA/GoN (Unpublished Reports)
- DoA/GoN. (2017). 2072 Salko bhukampabata kshati bhayeka Lalitpur jillaka sampadaharu (The Monuments of Lalitpur District Damaged by Earthquake 2015). Kathmandu: DoA/GoN.
- DoA/GoN (2018). State of Conservation: Kathmandu Valley World Heritage Property. DoA/GoN (Unpublished Reports).
- DoA/GoN (2019). State of Conservation: Kathmandu Valley World Heritage Property. DoA/GoN (Unpublished Reports).
- DoA/GoN (2015-2018). Disseminated Information. Kathmandu: DoA/GoN (Unpublished)
- KVPT (2017). Earthquake Response Campaign Overview of Projects. Kathmandu: Kathmandu Valley Preservation Trust.
- SHRESTHA, S. S. (2009). “If Hundreds of People Work for Rescuing People, Only One Person Can Do for Heritage Rescue”. In Research, Analysis and Preservation of Archaeological Sites and Remains. Nara: ACCU Nara, Japan.
- SHRESTHA, S.S. (2016). “Post-Earthquake Conservation, Reconstruction and Rehabilitation in Nepal: Current Status”. In The International Correspondent Regular Report No. 17. September 2016; Nara: Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO (ACCU) Nara, Japan.
- SHRESTHA, S.S. (2017). “Post-Earthquake Response to Cultural Heritage: Tradition of Cyclical Renewal”. In The Cultural Heritage of Nepal, before, during and after the 2015 Earthquakes; Current and Future Challenges. Kathmandu: Oriental Cultural Heritage Sites Protection Alliance (OCHSPA).

修復の完了した記念物と工事継続中の記念物の写真



1-1 地震により倒壊したスンダリ・チョーク



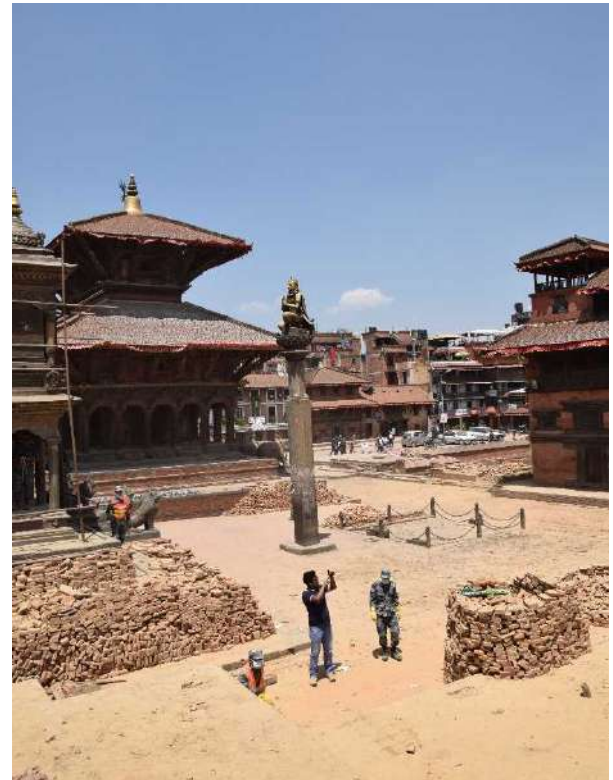
1-2 地震により倒壊したチャル・ナラヤン寺院



1-3 地震により倒壊したハリ・シャンカー寺院（石塔後部）



1-4 地震により倒壊したクリシュナ・マンディール寺院



1-5 地震により倒壊したマニ・マンダップ



1-6 地震により倒壊したタレジュ寺院



1-7 地震により倒壊したビシュウェッシュワル寺院



1-8 地震により倒壊したヨグ・ナレンドラ石柱像



2-1 修復後のスンドリ・チョーク東面



2-1-1 修復後のスンドリ・チョーク東面



2-2 修復後のチャル・ナラヤン寺院



2-3 修復後のハリ・シャンカー寺院



2-4 修復後のクリシュナ・マンディール寺院



2-5 修復後のマニ・マンダップ



2-6 修復後のタレジュ寺院



2-7 修復後のビシュウエッシュワル寺院



2-8 修復後のヨグ・ナレンドラ・マラ石柱像



2-9 修復後のビムセン寺院の石柱



2-9-1 修復後のヨグ・ナレンドラ・マラ石柱像



2-10 工事中のクンベシュウォル寺院



2-11 工事中のラダ・クリシュナ（八角形）寺院

パプア・ニューギニア



岐路に立つモツポア島：高まる価値と先細る保護管理についての一考察

ジェイソン・カリウィガ 教育助手
パプア・ニューギニア大学

パプア・ニューギニア中央州に位置するモツポア島は、文化的・歴史的に重要な遺跡を保護・管理するために何ができるのかを示す優れた研究事例です。パプア・ニューギニア大学がモツポア島を購入してから数十年間、管理計画および基本的施設や遺産を確実に保護するために重要な歩みを進めてきました。一方でモツポア島が全利害関係者に気づかせてくれることは、文化遺産管理の実践というのは全く流動的であり、内部にある障害と外部からの圧力の両方に対応を迫られ、常に監視と発展的強化が必要であるということです。

原住民の話すモツ語では、モツ＝島、ポア＝小石または砂の土手という意味です。

モツポア島は地下水のない島で、首都ポートモレスビーから 15km 南東に位置し、絵のように美しいブートレス湾に位置します（図 1 参照）。島のほとんどは険しい尾根から成り、その大きさは、長さ約 800 m、高さ 61m、最も幅の広い所で約 275m です。本島から浅瀬で 600m 離れています。島の植生はおもに草地（*Themeda triandra*、以前は *T. australis*）と、ユーカリで構成されていて、海岸沿いにマングローブが茂っています。島の北端は、唯一の平坦な地域で尖角砂嘴（～1.4 ha）からなり、草地によって安定しています（Allen 1978）。それに面するように潮汐砂嘴が北に延びていて、海岸は防波堤で守られています（図 2 参照）。ブートレス湾/ポートモレスビー地域全体の気候は、2つの相反する風によって決められます。南東の貿易風が 4 月から 12 月まで乾燥した涼しい気候をもたらし、1 月から 3 月は

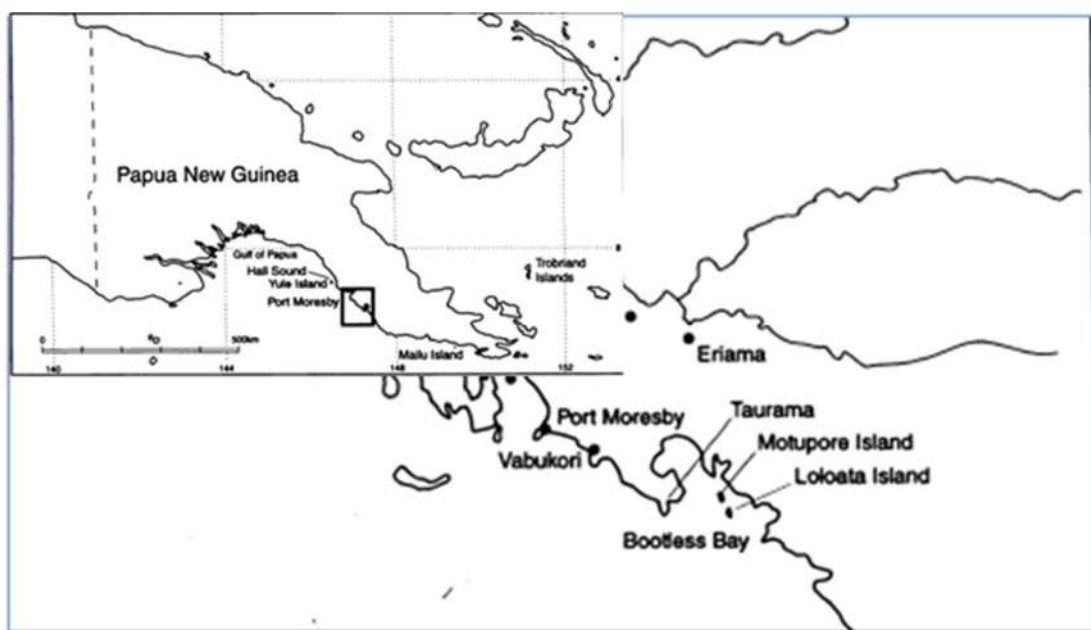


図 1 本文で言及した場所の位置を示す地図。出典：Allen et al.1997:13

北西モンスーンが優勢になり、暖かくて雨の多い気候になります。ポートモレスビー地域は雨蔭の中にあるため、降水量は国内で最も少なくなります（年間 1000～1500 mm）（MacAlpine et al.1983）。モツポア島は、考古学の野外調査基地および研究所として、また他の学問分野でも使用するために、1970 年にパプア・ニューギニア大学によって購入されました。現在もモツポア島は過去の埋もれた秘密を明らかにしているだけでなく、海洋生物学および環境科学研究の中心でもあります。モツポア島の研究プログラムは現在、モツポア島研究センター（MIRC）によって運営されています。

人々は島にきて、土器を作り、交易し、そして消えた

モツポア島における考古学発掘調査は散発ではありますが、1960 年代後半から 2018 年まで継続して行われています。累積的証拠などによれば、モツポア島は西暦 1200 年頃、東からやってきた人々の集団が最初に定住しました。彼らは島に定住し、大規模な土器製作センターを作り、広範囲に交易を行い、貝殻ビーズ装飾品を大量に生産しました（Allen et al1997）。遺物は大量に発見されており、剥片石器、動物の骨、貝殻ビーズ、大量の人骨、独自様式の土器などが含まれます（Allen2017）。パプア湾にあり、西に約 300～400 km 離れた土器を製作していない場所に、モツポア島の土器と類似した様式の土器があるという報告があり、その交易ネットワークの広さは驚くべきものです（Frankel et al 1994 : 28、Rhoads 1994 : 67）。モツポア島の人々の定住は、西暦 1700 年頃まで 500 年間続き、島は突然放棄されました（Allen1977）。モツポア島の歴史は、先住民のモツ族の口述歴史とも密接に絡み合っています。今日、首都やブートレス海峡周辺の西側地域に住む西モツ族は、祖先をモツポア島にまでさかのぼります。モツポア島に定住した人々は、近隣のロロアート島住民と戦いに明け暮れ、その後島を立ち去ったと言われています。このロロアート島住民は、現在ブートレス湾とその周辺地域に居住している東モツ族の祖先と見なされています（Oram1969）。実際、モツポアはかつて別名モツハヌアと呼ばれていましたが、ハヌアは「村」を意味します。

国家には憲法が必要である

モツポア島の北端に、永久保存の小さな建物が本島に面して建っています。その建物は海に近接したマングローブの並木の近くにひっそりと建ち、全く目立たず周りには何もなく、島のおもな住宅地域から離れたところにあります。多分パプア・ニューギニアの政治史に詳しい人だけが、この目立たない建物の



図2 砂浜から見た干潮時のモツポア島。島北端に向かって南に面している。2016 年。憲法の家（憲法の家）の位置は丸印で示す。
写真：ニック・サットン氏、以下参照 <<http://archaeologyactually.blogspot.com/2016/07/motupore-island-excavations-2016.html>>

重要性がわかることでしょう。パプア・ニューギニアの若者たちがここに集い重要な文章、つまり独立間近の国家憲法を起草し推敲した場所なのです。1972年に憲法策定委員会が設立され、自前の憲法作成が課せられました(Woolford 1976:138)。やがて憲法は国家独立の1ヶ月前の1975年9月に公式に採択されました。現在、「憲法の家」と呼ばれているこの建物は、国家重要歴史建造物としてモツポア島研究センターによって保護されています。

海の中に何かある

現在、モツポア島は、パプア・ニューギニアの人々には、海洋保存地域もしくは海洋生物学研究センターとして最もよく知られています。モツポア島はブートレス湾海洋保護構想/ブートレス湾管理海洋地域の中にあり、国の環境保護団体のトップである保護・環境保全機関(CEPA)によって管理されています。そして、日本の国際協力機構(JICA)と共に資金提供し運営しています(Kama 2016a, 「海の命を保護するCEPAとパプア・ニューギニア大学」参照)。

CEPAは次のように説明しています。

ブートレス湾は、広範囲にわたる主要な海洋生物生育地であり、そこにはマングローブの森、藻場、砂浜、岩礁海岸や暗礁、潮間帯と浅海帯にある炭酸塩と泥の海底、開放水域、斑や裾サンゴ礁などが含まれます。湾にはまた、多数の沈没船が海底に散在しており、それぞれが独自の生物学的群落を形成しています(保護・環境保全機関:CEPA 日付不明)。

確かに、ブートレス湾は動植物の多様性で知られています(Baine & Harasuti 2007)。例をあげると、ブートレス湾を住处とする魚類は485種、合計72科を代表しており、その種類はさらに515から558種に及ぶと研究から推定できます(Drew et al. 2012)。

それでは、今までどんな活動をしてきたのか

パプア・ニューギニア大学モツポア島研究センターは、直面する多数の課題や問題があるにも関わらず、過去40年間モツポア島の遺産をうまく運営管理してきました(以下参照)。モツポア島にある施設は次のようなものです。多数の部屋を有する2棟の大宿泊棟、会議室と設備の整った調理場、研究センター長の現地住居、最近完成した野外研究室、その他には貯水槽とポンプ、現地管理人の住居、発電装置などです。モツポア島研究センターと関係者は、ブートレス湾は今や保護地域の指標となっていると断言しています。モツポア島研究センターは、地元および国際団体、政府および非政府機関などとも有効な協力関係を築いてきました。例えば、モツポア島研究センターは、地元住民を教育・組織して、本島に隣接するブートレス湾に沿って生育するマングローブの森の修復、移植、管理などに参加してもらうという活動の最前線にいます(Mangun 2019 参照)。モツポア島は、パプア・ニューギニア大学の学生や大学院生および研究者が、会議、研修、研究をするためのセンターとして今も使用されています。

問題はありますか？もちろんあります！

モツポア島が直面する問題は固有のものですが、文化的に重要な遺産を所有する世界の国々と共通する問題も抱えています。新しい野外研究室以外の施設は、大学が島を購入した当時のままで、うまく維持管

理されてはいますが、時の経過による老朽化はさけられません。「憲法の家」でさえも、修理が必要な状態です。資金が限られていることは常に問題となっています。モツポア島研究センターの所長代理のジョン・ジェノラガニ氏はかつて次のように述べました。

モツポア島は、我が国最初で唯一存続する海洋研究の象徴です。1970年代からモツポア島研究センターでの研究に基づいた論文が何千件も出版されています。残念なことに通例の予算削減によってこの20年間に研究所は劣化がすすみ、大学は修理に最善をつくしました。今は、研究設備の中心となる重要施設の維持管理だけを実施しています。つまり、宿泊施設、タヒラ島とモツポア島にある職員宿舎などです。研究に関しては、学部生と大学院生のための通常授業は行われていますが、研究に必要な実験室、ダイビング装備、インターネットや電気通信などのIT関連施設などは、ここではもはや利用できません(Karma 2016b)。

モツポア島に間接的な影響があると最近懸念されるのは観光です。モツポア島から南東に1km以内にある近隣のロロアータ島には、興味深い歴史があります。モツポア島に比べて、ロロアータ島の考古学研究は限られたものでした。この調査から、ロロアータ島が2度にわたって人々が居住しており、最後は300年前であり、それはモツポア島に人々が定住していたのと同時期だったこと、ロロアータ島から発見された土器もモツポア島で見つかった土器とデザインが類似していることがわかりました(Sullivan & Sassoon 1987)。1895年ヨーロッパ人と接触した頃に、土地所有者から入手されたロロアータ島は個人所有となり、1977年に島に観光リゾートが開発されました。2019年9月、130,000,000パプア・ニューギニア・キナ(約39億円)かけて新しいダイビングリゾートが開業しました。ところが、2020年8月に損害賠償の問題がもち上がったのです。8月14日、隣接する本土のトゥブセレイア村に古くから住む地主が、ロロアータ島の開発者に抗議の声を上げました。先祖の墓地を破壊し、近隣海域で釣りをする住民にリゾート従業員らが暴力や暴言による嫌がらせを行ったこと、さらに自分達がビジネス機会を損失したことや、総合的および歴史的に判断し、所有者に対して損害賠償の請求を行いました(2020年 Emtv Online 2020「Nasfund は住民の懸念を調査する」)。この問題は地元の知事とリゾートの所有者によって取り上げられましたが、どのような結果になるかはまだ不明です。ロロアータ島の例はモツポア島に直接影響を与えませんが、いくつかの重要なポイントがあります。

- モツポア島は、早い段階で文化的に重要であると公式に認められ、ロロアータ島とは対照的に行動を起こしました。
- ブートレス湾において、地元漁師と保護担当局との間で妥協して和解する必要があります。
- 地元モツ族の土地所有者は、モツポア島の管理に参加する必要があります。
- ブートレス湾の観光業者は、周辺地域や海域の重要性を認識し、保護規則を厳守する必要があります。

岐路に立つモツポア島、その未来

そして今、モツポア島はどこに向かうのか。保護が必要なことは確かですが、文化遺産保護への推進力はどこから来ているのでしょうか。モツポア島は学術研究分野以外ではほとんど周知されておらず、より多くの一般の人々が関心を持つこともなく、世間では時として経済的発展が遺産保護より優先されてい

ます。ミュークは次のように指摘しています(1988:66-67)。「多くのパプア・ニューギニア人も、伝統的な考古遺跡は開発の妨げとなると考えています。それゆえ計画企画者や政策立案者は、不経済な事業にお金をかけるべきではないと誤解しがちなのです」。さらに、十分な資金、適切な最新管理計画、継続的な組織間協力体制などがモツポア島研究センターの活動には不可欠です。確かなことは、大学が今後もモツポア島の所有を続けることが最も重要であるということです。パプア・ニューギニア大学のスティーブン・ウィンデュオ教授は次のように断言しています。「モツポア島が大学の所有である限り、我が国の若者らに大学が提供している考古学、人類学、歴史学、政治学、科学および教育などの場は損なわれることはないだろう。モツポア島は学びの場としても国民にとっても比類ない場所です」(Winduo 2016)。

謝辞

筆者は、マシュー・リーブスレイ教授(パプア・ニューギニア大学)とテプシー・ベニ大学院生の指導の下で、モツポア島遺跡の年代決定のための発掘調査(2016年~2018年)に参加しました。パプア・ニューギニア大学の考古学研究室の皆様に感謝します。

参考文献

- Allen, J. 1977. Fishing for wallabies: Trade as a mechanism for social interaction, integration and elaboration on the central Papuan coast. In J. Friedman and M. Rowlands (eds), *The Evolution of Social Systems*, pp. 419–455. Duckworth, London.
- Allen, J. 1978. The physical and cultural setting of Motupore, Central Province, Papua New Guinea. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 1:47-55.
- Allen, J. 1985. Comments on complexity and trade: a view from Melanesia. *Archaeology in Oceania* 20(2):49-57.
- Allen, J. 2017. *Excavations on Motupore Island Central District, Papua New Guinea*. University of Otago, Working Papers in Anthropology, Number 4. Department of Anthropology and Archaeology, University of Otago, Otago.
- Allen, J., Holdaway, S. & Fullagar, R. 1997. Identifying specialisation, production and exchange in the archaeological record; the case of shell bead manufacture on Motupore Island, Papua. *Archaeology in Oceania* 32:13-38.
- Baine, M. & Harasti, D. 2007. *The marine life of Bootless Bay Papua, New Guinea*. Motupore Island Research Centre, Port Moresby
- Cepa, UPNG to protect marine life in Bootless Bay. 2017, July 27. *The National*. Retrieved from <https://www.thenational.com.pg/cepa-upng-protect-marine-life-bootless-bay/>
- Conservation and Environment Protection Authority. n.d. *Bootless Bay Managed Marine Area*. Retrieved from <https://oceanconference.un.org/commitments/?id=21432>

Emtv Online. 2020, August 14. Loloata Island under Dispute. *Emtv Online*. Retrieved from <<https://emtv.com.pg/loloata-landowners-present-petition-to-government/>>

Drew, J., & Buxman, C., Holmes, D., Mandecki, J., Mungkaje, A., Richardson, A., & Westneat, M. 2012. Biodiversity Inventories and Conservation of the Marine Fishes of Bootless Bay, Papua New Guinea. *BMC Ecology*, 12(1):1–15.

Frankel, D., Thompson, K., & Vanderwal, R. 1994. Kerema and Kinomere. In D. Frankel and J. Rhoads (eds) *Archaeology of a Coastal Exchange System: Sites and Ceramics of the Papuan Gulf*. Research Papers in Archaeology and Natural History, No. 25. pp. 1-49. Canberra: Division of Archaeology and Natural History, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.

Kama, L. 2016a, August 11. Marine protected area to be established. *The National*. Retrieved from <<https://www.thenational.com.pg/marine-protected-area-to-be-established-2/>>

Kama, L. 2016b, August 12. Motupore island loses value. *The National*. Retrieved from <<https://www.thenational.com.pg/motupore-island-loses-value/>>

Mangun, W. 2019, December 27. Awarded for saving mangroves. *The National*. Retrieved from <<https://www.thenational.com.pg/awarded-for-saving-mangroves/>>

McAlpine, J.R., Keig, G. & Falls, R. 1983. *Climate of Papua New Guinea*. Canberra, Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation and Australian National University Press.

Muke, J. 1998 The Death (and Re-birth) of Kuk: A Progress Report on the Recent Development at the Kuk Prehistoric Site, Western Highlands Province. In *Kuk Heritage: Issues and Debates in Papua New Guinea*. A. Strathern and P. Stewart, eds. pp. 64–86. Port Moresby, Townsville and Pittsburgh: The National Museum of Papua New Guinea, the James Cook University Centre for Pacific Studies and the Department of Anthropology, University of Pittsburgh.

Nasfund will look into villagers' concerns. 2020, August 15. *Kalang FM*. Retrieved from <<https://kalangfm.com/news/nasfund-will-look-into-villagers-concerns-912>>

Oram, N.D. 1969. Taurama. Oral sources for a study of recent Motu prehistory. *Journal of the Papua New Guinea Society* 2(2):79-91.

Rhoads, J.W. 1994 The Popo site. In D. Frankel and J. Rhoads (eds) *Archaeology of a Coastal Exchange System: Sites and Ceramics of the Papuan Gulf*. Research Papers in Archaeology and Natural History, No. 25. pp. 53-69. Canberra: Division of Archaeology and Natural History, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.

Sullivan, M.E. & Sassoon, M. 1987. Prehistoric occupation of Loloata Island Papua New Guinea. *Australian Archaeology* 24:1-9.

Winduo, S. 2016, November 25. Necklace of green shells. *The National*. Retrieved from
<<https://www.thenational.com.pg/necklace-green-shells/>>

Woolford, D. 1976. *Papua New Guinea: Initiation and Independence*. University of Queensland Press, Brisbane.

スリランカ

	スリランカ北部州ジャフナ地区にあるテル・ムーディ・マダムの歴史と修復
	ゲティ・タラバジャ 開発職員 III 国家遺産省 考古学局 考古学地域事務所(北部) 考古学博物館

はじめに

スリランカでは、巡礼者、商人、使用人、旅行者などのために、マダムと呼ばれる建物が建設されてきました。この建物はタミール語でマダム、シンハラ語でアンバラマと一般には呼ばれています。その建物は、街路を跨ぐように建てられ、両側に通路があります。2本の通路は、商品をもって町から村に旅をする人々が安全に休息できる場所を提供してきました。タミール語でテル・ムーディ・マダムという用語は、マダムの両側にある通りにかけられた屋根システムを意味します。

テル・ムーディ・マダムは、遺物条例9条(1940年)で考古保護記念物として保護されています。ジャフナ市から32km、ジャフナポイントシペドロ道路の右側ヴァン・コビラディ分岐点からタンパライ道路を140mすすんだ場所に位置しています。この遺跡はグラマ・セバカ地区 J/401 ポイント・ペドロ、ポイント・ペドロ地区事務局に位置しています。位置は北緯15度、東経30度です。



図1 マダムの位置

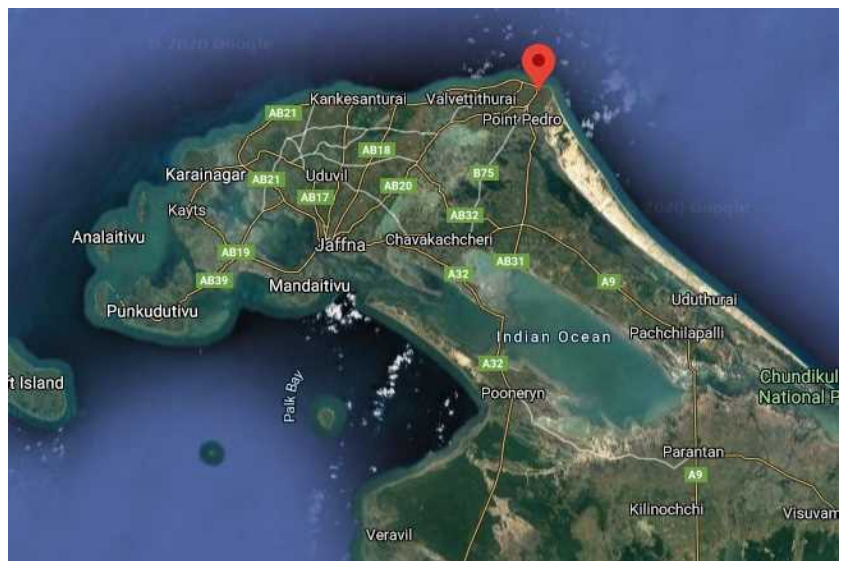


図2 マダムの位置(拡大図)



図3 19世紀のマダム



図4 1990年～2019年のマダム



図5 破損した2019年のマダム



図6 修復後の2020年のマダム

1.1 古代交通とマダム

スリランカ北部では、昔の人々は居住地の間を行き来し、交通機関を利用して交易を行い、生活を豊かにしました。人々は陸路も海路も利用しましたが、町や村から陸路で港や波止場まで行く時、長距離の旅や荷物を運ぶためにはおもに牛車を使いました。

牛車で陸路に行く時に、旅の途中で人々は昼夜を問わず安全と安らぎを求めて、マダムで荷物を降ろし休息を取りました。そこで、商業センター、寺院周辺地区の集会所および旅の途中の水飲み場として、ジャフナにこのような記念建造物マダムが建設されました。スリランカ国内の他の地域でも、同じような建物は多数ありますが、建築様式や文様などが異なります。沿道に建つこれらの遺産建造物のうちジャフナにある唯一の例が、ポイント・ペドロにあるドラヴィダ建築様式のユニークな特徴を持ったテル・ムーディ・マダムなのです。このマダムには、牛擦り石、井戸、石製水槽などが併設されています。

1.2 マダムの起源

オランダの支配者が道路システムをジャフナに導入した時に、この種のマダムは、塩やアリカナッツなどの商品を輸送し、販売する目的のためにも建てられました。ポイント・ペドロのマダムは、バラモンの

僧侶によって建てられたと言われています。彼はパンチャドチャラ・サルマで、バラモンのヴァイテスワラ導師の父であり、1898 年と 1901 年の間にそこに住んでいました。

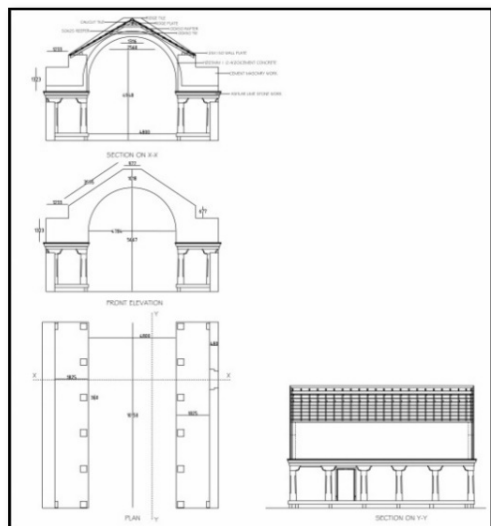


図7 マダムの図面

1.3 建築の特徴

マダムは、よく磨いた石灰岩で建設されました。テル・ムーディ・マダムはオープンな二重壁構造で、後部の壁は長さ 35 フィート、幅 34 フィートあり、人々は雨や厳しい太陽を逃れてそこで安全に休むことができます。マダムの中心構造である 2 つの壁の間の距離は 15 フィート 8 インチです。両側のベランダの後壁は石灰岩と漆喰で造られ、地上からの高さは 13 フィート 10 インチです。

1.4 柱

柱は、4 個の石灰岩の基礎の上に建てられ、ドラヴィダ建築風の彫刻を施した石造です。柱の各部分は、柱体、柱頭、アーキトレーブ、フリーズ、コーニスに分けることができます。マダムの片側には、計 8 本の彫刻された石柱があり、そのうち 6 本は前面に 2 本は後方にあります。マダムのもう一方も同じ構造です。マダムの建造を支援し石柱を調達した人々の名前が、6 本の 1.5 フィート高の彫刻石柱にタミール語で刻まれています。が、判別できない名前もあります。



図8 マダムの柱

2. テル・ムーディ・マダムの修復理由

マダムの地盤面は、当初はもちろん砂でおおわれていました。道路改修で道路地盤が盛り上がり、大型車両によるマダムの破損が、2019年に2回発生しています。

2.1 事業資金

前回の事故による被害の後、ジャフナ考古学局は直ちにマダムの保存に尽力しました。ポイント・ペドロ町開発協会とポイント・ペドロ・スイス支部は、部局事務局を通して財政負担金を分配し、テル・ムーディ・マダムを直ちに保存するよう考古学局に要請しました。そして、考古学局長の承認を受け、保存担当官の指導のもと中央文化基金の拠出金を得て、マダムを以前のように修復して一般に引き渡すための修復工事が開始されました。

2.2 修復工事

工事期間：2019年10月9日～2020年1月15日

工事経費：1,103,158.00 LKR（スリランカルピー）

2.2.1 テル・ムーディ・マダムの屋根を支えるアーチの修復法

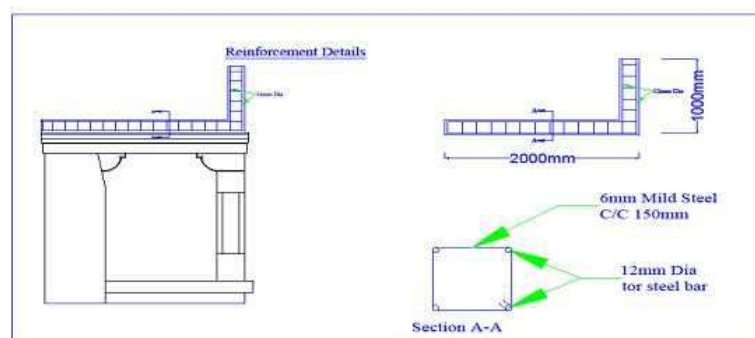


図9 アーチ用の四角形鉄材

保存修復の専門家は、マダムのアーチが屋根と古代のマダム構造を長く支えられるのか、またマダムが頑丈かどうかを検査しました。彼らの助言に従い、鉄材の上に、木板で作った（コンクリート打ち込み用の）型枠を設置しました（図9）。セメント、砂、碎石（3/4インチ）を1:2:4の割合で混合した材料を用いて、幅9インチのコンクリート製アーチを作りました。コン

クリートの上に強化レンガを置いて石灰で塗装を施し、アーチは元の形と同じように建てられました。マダムの四方にかかるアーチの荷重を支えるために、コンクリート製の柱が追加で建設されました（図10、11）。



図10&11 アーチの修復工事

2.2.2 伝統的モデルの屋根に再建

1990年代には、マダムの両側を覆うように屋根が設置されました。まず壁板と4本の鉄材が取り付けられ、鉄柱にはパルミラ材で作られた屋根のアーチが取り付けられました。劣化して損傷した屋根の構造は、地元の伝統的な熟練大工が取り替えました。屋根用木材の垂木が11キュービット（約506～616cm）の長さで、45cm間隔で取り付けられました。パルミラ材平板（リープ）の品質が不十分だったので、1級品質の木材を元の場所に取り付けました。古い瓦は洗浄し、追加で瓦も購入しました。軒瓦はセメントモルタルで固定し、屋根の両側の端には、木材の安全性向上のためにバランス板を取り付けました。そして木材の耐久性を高めるために、防腐油剤を塗布しました（図12、13）。



図12&13 屋根の再建

2.2.3 劣化した壁と柱の修復

劣化したマダムの2つの側壁は撤去されました。巨大な鉄板の使用によって石灰岩にひびが入り、そのため石灰岩で作られた壁が損傷しており、さらに建物表面を木の根が覆い、建物の中に侵入していたからです。屋根の荷重に耐えるため、壁内部に長さ6インチ、厚さ12mmの鉄材を2本入れ、セメント、石灰、砂を1:2:10の割合で混ぜ合わせた漆喰を塗りました。マダムの右前面の玄関（ポイント・ペドロ通りではない）と、店舗および奥にあるバラモンの家をつなぐ壁は、いったん撤去されましたが、マダムの特徴を保持するために再建されました。

印度菩提樹（*Ficus religiosa*）の木根が、店舗付近の壁に侵入していたので、古い壁の一部、長さ65cm、幅40cmの部分を撤去し、修復しました。マダムの保護のために人々が建てたコンクリート製の柱は撤去され、元通りに復元されました（図16、17）。



図 14、15、16&17 壁の修復工事の進行過程

2.2.4 マダムのペランダの床石の仕上げ

マダムの床には、丁度良い大きさの石灰岩の石板が敷かれていて、その間の溝は細かい漆喰（アシュラー）で埋めてありました。しかし、床の漆喰層は、人々の日々の営みや自然要因で消失していました。そこで石灰、白蟻塚の土、赤瓦粉を等量に混合して作った検査済みのセメントを石板のすき間に充填しました（図 18、19）。



図 18&19 修復工事前の充填作業

2.2.5 マダムの左側後壁にある石枠のある戸口の修復



図 20 扉の修復工事前（左）と後（右）

扉がなかったので、人々が入口をコンクリートのブロックでふさいでいたようです。今回の修復工事中には、このコンクリートブロックを撤去し、一時的保護のために入口をレンガで再建しました。この仮設レンガ壁は、後に入口が再修理される時には取り壊される予定です。

2.2.6 マダムに関連したユニークな建造物の修復

遺産建造物を傷つける恐れがあったので、ポイント・ペドロ・シヴァン寺院管理者に保管されていた、ランプ台、牛の飲水用の丸石水桶、テル・ムーディ・マダムの利用者のための牛の擦り石などが、元の場所にもどされました。ランプ台と水桶（図 21）が寺院から持ち込まれ、恒久的に再設置されました。



図 21 ランプ台と水桶



図 22 夜景

2.2.7 仕上げ作業

壁はすべて洗浄され、古い水漆喰が取り除かれ、壁の内側と外側は新しい水漆喰で2度塗りされました。考古学局長の許可を得て、タミール語、シンハラ語、英語の3カ国語で書かれた、高さ6フィート、

長さ 3 フィートの説明板がマダムの近くに設置されました。マダムの古さを際立たせるために、夜間照明用に自動で光る黄色の電球が取り付けられました。隣家から一時的に電気を引きましたが、電気を永続的に確保するための努力が続いています。

さいごに

スリランカ北部には危機に瀕している遺産建造物が多くあり、その復元必要性は高いのですが、様々な理由で修復ができません。理由としては、不十分な資金配分、個人の所有地にある遺産建造物修復への所有者による拒絶、人々の非協力、都市化、道路の拡幅などがあげられます。私達には過去の内戦や自然災害、様々な人間活動から生き延びた地域遺産を守る必要があります。スリランカで唯一の特色あるマダムである、ジャフナのポイント・ペドロ・テル・ムーディマダムが修復され、2020 年 1 月 15 日に一般に引き渡されたことは注目すべき事なのです。

参考文献

1. Sivalingarajah, S. "Jaffna Culture - Vanished and Hidden", *Transport* (pp.46-47). Colombo: Kumaran Book House, 2014.
2. Dr. Malini Dias, Sunil Bandara Korale, Kalpa Asanga, "The Archaeological Heritage of Jaffna Peninsula" (pp.154, 225), Department of Archaeology, 2016.
3. Sasitha, K. "Heritage Symbols of Northern Sri Lanka & their Preservation: A Study Base on Jaffna", *Life Style of Jaffna* (pp. 55-65) Jaffna, 2012.
4. Sivaruby, V. "Aavuranchi (Cow rubbing) Stones and Sumaithaangi (Load Bearing) Stones in Tamil Cultural Life", *Life Style of Jaffna* (pp. 60-72) Jaffna 2012, in Tamil.
5. Magazine, *Thedal* (pp. 60-173) Archaeological Study Circle, University of Jaffna, 2016.
6. Kumutha. S, *Madam & Madam Architecture in Jaffna Culture*, 2007.
7. B. Kabilan, Conservation Officer, *Therumoodimadam Conservation Report 2020*, Department of Archaeology, Jaffna.
8. "Documentation of Heritage Features: A Research Based on Jaffna District", Central Cultural Fund, Jaffna Project (Tamil), 2017.